



カン・ソニョン、2012年9月以来の約4年ぶりの個展である。カンさんは長崎大学(井川惺亮ゼミ)を卒業し、多摩美術大学大学院(木嶋正吾ゼミ)を修了し、韓国に帰国していた。私が2015年11月にシェーマ美術館に招かれた時には、カンさんに大変お世話になった。プロフィールを見ると、韓国で個展を、日本の長崎、東京でグループ展に参加しているので、旺盛に活動している姿が伺える。今回、《still life》(紙・鉛筆)シリーズを16点展示した。サイズは様々であり、着色している作品も幾つかある。本やコップなどの日用品を主題とし、写真のように写し取って変形している。版画に見える技法も特徴的である。私が画廊に

入って一番最初に驚いたのが、上の一番大きな写真の作品である。写真がボケていて申し訳ないが、それがまた私の視線を表わしている。この作品は、カンさんが見ることと手を動かして描くことが等価になっている点に素晴らしさがある。ここまで視線と描線が一致していることは珍しい。他の要素、即ち躊躇いや戸惑い、欲というものが一切ないのだ。私もまた、カメラを向けて自分が見ているところに焦点が当たり、このような写真になったのであった。カンさんにはこのような特殊な力があるのだから、その能力を充分に発揮するような作品を今後も描いて欲しいし、そのような場に身を置くことを私は切に願っている。

